

幼稚園に対する保護者による期待に関する調査

山 口 雅 史

Investigation about expectation by parents for a kindergarten.

YAMAGUCHI Masafumi

問 題

ここ10年来、幼稚園は少子高齢化社会の影響の波をかぶり、経営的にも苦しい時期を過ごしてきた。倉戸（2001）は「特に私立幼稚園では、園の存続をかけて、多くの園では、長時間保育、給食、通園バス、才能教育に活路を見いだそうとしている」ことを指摘した。このうち、“延長保育”、“給食”、“通園バス”は、幼稚園関係者のなかで俗に“3種の神器”と呼ばれ、募集対策の要と考えられていると言っても過言ではない。

確かに幼稚園における教育活動は、幼稚園教育要領に基づき、ここに各幼稚園の教育理念を加味して行われるものであるが、保護者の要望を理解し、保護者の視点から幼稚園の活動を見つめ直し、カリキュラムを検討することも必要なことであろう。

柏木・永久（1999）は「親の価値観が多様化し、子どもをもつことに対する意識が変化している」点を指摘しているが、そうであるならばなおのこと、保護者が幼稚園へ何を期待しているのかを把握することは幼児教育を行っていく上で重要なことと言えよう。しかし、倉戸（2001）による「保護者の希望にあった、“保育時間の延長”に解決を求めたのならば、それは幼稚園の保育園化で、その分野は保育園の得意とするところで幼稚園は太刀打ちできないであろう。幼稚園に求められる教育内容を考えなければならない。」という指摘からも、幼稚園が取り入れるべき保護者の要求も、あくまで“教育内容の充実”という側面から考えていく必要があるであろう。

加えて、近年幼稚園における育児支援の提供が求められるようになってきている。この点に関して、高濱（2000）は「幼稚園や保育所は、これまで育児支援の役割を果たしてきた。しかし、それは十分ではなかったと考えられる。園側の視点に加え、親側の視点をより積極的にとり入れる必要があるのではなからうか。つまり園を有効に利用してもらうには、親側の育児に対する認識やニーズを知ることが必要だと思われる。」と述べている。つまり、保護者の意識やニーズを積極的に取り入れた実効性のある育児支援が現在早急に必要とされており、育児支援という視点からも保護者の幼稚園への期待の様相を探ることが求められる。

そこで、本研究は、現在幼稚園に在園中の子どもを持つ保護者（母親）に対して調査を実施し、幼稚園に対してどのような期待をしているのかの実態を把握することを目的とする。

方 法

1. 調査対象

調査対象者は、愛知県内の私立幼稚園から15園を抽出し、各調査実施園ごとに無作為に選ばれた60名程度の保護者（母親）とした。総数は857名であるが、質問紙への記載等に不備があった者を除外し、816名を分析の対象とした。

対象者の平均年齢は34.4歳（SD = 3.53）で、24歳から47歳の間に分布している。

子どもの人数は、平均2.06人（SD = .65, 最高；6人, 最少；1人）であり、長子の年齢は平均6.42歳（SD = 2.54, 最高年齢；23歳, 最少年齢；3歳）、末子の年齢は平均3.36歳（SD = 1.71, 最高年齢；7歳, 最少年齢；0歳）であった。

対象者の最終学歴は、中学・高等学校卒が261名（32.0%）、専門学校・短期大学卒が397名（48.7%）、四年制大学・大学院卒が158名（19.4%）であった。

2. 手続き

①質問紙の作成

私立幼稚園園長2名、私立幼稚園教員1名、幼児教育を専門とする大学教員1名の計4名の協議により、幼稚園に対して保護者が期待しているであろうと思われる項目を40項目抽出した。

これらの項目に対し、「次にあげる項目を育ててくれることを、幼稚園に対してどの程度期待していますか？」という教示のもと、「とても期待している」から「まったく期待していない」までの5段階で評定する質問紙を作成した。

②質問紙の配布

質問紙は、調査対象として選ばれた15園の各園長により、担任教員を通じて保護者に配布し、一定期日後（数日から1週間程度。園により不定）同じく担任を通じて回収した。

その際、回答は無記名とし、匿名性が保てるよう封筒に入れて提出を求めたり、回収箱を別途用意するなどの対応をとった。

結 果

1. 因子分析

幼稚園への期待度の得点に対し因子分析を行った。初めにスクリープロットを検討し、因子数を5と定めた。因子の抽出は主因子法により行い、バリマックス回転を施したところ、9回の回転で収束した。得られた8因子の累積寄与率は48.87%であった。因子分析の結果は表1に示す。

第1因子（項目数11）は、「友達と仲良く遊ぶことができる」、「困っている友達を助けたり、悲しんでいる友達をなぐさめることができる」、「間違ったことをした時、きちんと謝ることができる」、「親や先生を尊敬することができる」などの11項目から構成されている。これらは幼稚園における安定した人間関係を維持できることに関する因子であると考えられ、〈人間関係〉因子と命名した。

第2因子（項目数11）は、「役になりきって、お店屋さんごっこなどの遊びを楽しむことができる」、「自分のイメージにそって、ものを作ることができる」、「夢中になって遊ぶことができる」、「自信を持っていろいろなことに取りくむことができる」などの11項目から構成されている。これらは様々な遊びに積極的に取り組み、遊びに熱中し、楽しむことができることに関

幼稚園に対する保護者による期待に関する調査

表 1. 幼稚園への期待度得点の因子分析結果

(1) 第 1 因子〈人間関係〉

- 09. 友達と仲良く遊ぶことができる。
- 11. 困っている友達を助けたり、悲しんでいる友達をなぐさめることができる。
- 10. 年上や年下の子とも仲良く遊ぶことができる。
- 12. 落ち着いて先生の話聞くことができる。
- 13. 自分の意見や思いを表現することができる。
- 27. 物事を最後までやり遂げることができる。
- 29. 間違っことをした時、きちんと謝ることができる。
- 26. いろいろなことに興味を持って、探究することができる。
- 25. 思い通りにいなくても、がまんすることができる。
- 15. 友達とのトラブルを自分たちで解決することができる。
- 28. 親や先生を尊敬することができる。

(2) 第 2 因子〈遊び〉

- 34. 役になりきって、お店屋さんごっこなどの遊びを楽しむことができる。
- 35. 自分のイメージにそって、ものを作ることができる。
- 33. 夢中になって遊ぶことができる。
- 38. ひとりで何かに集中して遊ぶことができる。
- 32. 植物や動物を育てる喜びを味わう。
- 39. 「かごめかごめ」のような昔から伝わる遊びを楽しむ。
- 40. 「けん玉」や「縄跳び」のように技能が必要な遊びを楽しむ。
- 30. 自信を持っているいろいろなことに取りくむことができる。
- 37. 泥んこになって遊ぶ。
- 36. 戸外で思いっきり身体を動かす遊びを楽しむ。
- 16. 友達を笑わすなど、場を和ませることができる。

(3) 第 3 因子〈生活習慣〉

- 02. 自分で服を着替えることができる。
- 03. 箸をきちんと持つなど、食事のマナーを身につけることができる。
- 06. オムツをせず排泄することができる。
- 04. 「おはようございます」などのあいさつができる。
- 01. 決まった時間に起床したり、就寝したりできる。
- 05. 好き嫌いなく食事ができる。
- 08. 遊んだおもちゃを自分で片付けることができる。
- 07. 正しい言葉遣いができる。

(4) 第 4 因子〈小学校課題〉

- 18. 足し算、引き算などの簡単な計算ができる。
- 19. 簡単な英語を話すことができる。
- 17. ひらがなの読み書きができる。
- 24. 簡単な楽器を演奏することができる。
- 31. 男の子・女の子としての自覚がある。
- 20. サッカーなどのスポーツに親しんで取り組む。
- 14. リーダーシップをとることができる。

(5) 第 5 因子〈表現活動〉

- 22. 音楽にあわせ踊ることを楽しむようになる。
- 23. 歌を歌うことを楽しむようになる。
- 21. 楽しんで絵が描けるようになる。

する因子であり、〈遊び〉因子と命名した。

第3因子（項目数8）は、「自分で服を着替えることができる」、「箸をきちんと持つなど、食事のマナーを身につけることができる」、「『おはようございます』などのあいさつができる」などの基本的な生活習慣形成に関する8項目から構成されており、〈生活習慣〉因子と命名した。

第4因子（項目数7）は、「足し算、引き算などの簡単な計算ができる」、「ひらがなの読み書きができる」、「簡単な楽器を演奏することができる」などの習い事あるいは小学校における教科学習内容に関する項目と、「男の子・女の子としての自覚がある」、「リーダーシップをとることができる」などのどちらかというと児童期以降の比較的后期の発達課題に関する項目から構成されている。いずれの項目も小学校期の課題を先取りするような内容であることから、〈小学校課題〉因子と命名した。

第5因子（項目数3）は、「音楽にあわせ踊ることを楽しむようになる」、「歌を歌うことを楽しむようになる」、「楽しんで絵が描けるようになる」の3項目のみから構成される因子で、〈表現活動〉因子と命名した。

2. 下位尺度の特定

続いて、得られた5因子を下位尺度として用いるべく α 係数による信頼性分析を行った。その結果、第1因子（ α 係数.89）、第2因子（ α 係数.85）、第3因子（ α 係数.87）、第4因子（ α 係数.85）、第5因子（ α 係数.91）とも α 係数は.80以上の値を示し、いずれも高い内的整合性を示した。そこで、5因子それぞれを5つの下位尺度とし、各項目の期待度得点の平均値を下位尺度得点として分析を行うこととした。また、40項目全ての得点の平均値を求め、これを幼稚園への期待度の総合得点とした。

各得点の平均値は、〈総合〉得点 $M = 3.8$ （ $SD = .50$ ）、〈人間関係〉得点 $M = 4.3$ （ $SD = .52$ ）、〈遊び〉得点 $M = 4.1$ （ $SD = .55$ ）、〈生活習慣〉得点 $M = 3.3$ （ $SD = .85$ ）、〈小学校課題〉得点 $M = 2.9$ （ $SD = .84$ ）、〈表現活動〉得点 $M = 4.2$ （ $SD = .80$ ）であった。

5つの下位尺度の期待度得点は、〈人間関係〉得点が最も高く、〈表現活動〉得点、〈遊び〉得点がこれに続く。これら3つの得点はいずれも4.0以上を示しており、幼稚園への期待がかなり高いことがわかる。それに比べ、〈小学校課題〉得点は2.9と「どちらでもない」の3点を下回る値を示しており、幼稚園に対してはあまり期待されていないようである。〈生活習慣形成〉も3.3という値を示し幼稚園への期待度はあまり高くはないようである。

3. 保護者の属性による幼稚園への期待得点の検討

(1) 対象者の年齢

対象者（母親）の年齢をもとに平均値（34.4歳）により2群に分け、年齢高群（ $N = 483$ ）と低群（ $N = 333$ ）との間で各期待度得点を比較した。t検定の結果、年齢低群の方が期待度の〈総合〉得点は高い値を示していた（ $t(814) = 2.4, p < .05$ ）。下位尺度においても、〈生活習慣〉得点（ $t(814) = 2.2, p < .05$ ）、〈小学校課題〉得点（ $t(814) = 3.2, p < .05$ ）、〈表現活動〉得点（ $t(814) = 2.8, p < .05$ ）のいずれも年齢低群の期待度得点が有意に高いことがわかった。

(2) 長子の年齢

対象者の長子の年齢をもとに平均値（6.4歳）により2群に分け、長子年齢高群（ $N = 466$ ）と低群（ $N = 350$ ）との間で各期待度得点を比較した。t検定の結果、長子年齢低群の方が期

待度の〈総合〉得点は高い値を示していた ($t(814) = 4.2, p < .05$)。下位尺度においても、〈遊び〉得点 ($t(814) = 2.3, p < .05$)、〈生活習慣〉得点 ($t(814) = 4.0, p < .05$)、〈小学校課題〉得点 ($t(814) = 4.1, p < .05$)、〈表現活動〉得点 ($t(814) = 3.7, p < .05$) のいずれも年齢低群の期待度得点が有意に高いことがわかった。

また、長子の年齢は対象者の年齢とが相関している可能性を検討するため両者の相関係数を求めたところ、.51と中程度の相関を示していることがわかった。

(3) 末子の年齢

対象者の末子の年齢をもとに平均値 (3.4歳) により2群に分け、末子年齢高群 ($N = 561$) と低群 ($N = 255$) との間で各期待度得点を比較した。 t 検定の結果、末子年齢低群の方が期待度の〈総合〉得点は高い値を示していた ($t(814) = 2.3, p < .05$)。下位尺度においても、〈生活習慣〉得点 ($t(814) = 2.6, p < .05$)、〈小学校課題〉得点 ($t(814) = 2.6, p < .05$)、〈表現活動〉得点 ($t(814) = 2.3, p < .05$) のいずれも年齢低群の期待度得点が有意に高いことがわかった。また、対象者の年齢との相関係数を求めたところ、.37とやや弱い相関を示すにとどまった。

(4) 対象者の学歴

対象者の最終学歴をもとに高学歴群 (四年制大学・大学院卒群) ($N = 261$) と低学歴群 (中学, 高等学校, 専門学校, 短期大学卒) ($N = 555$) の2群に分け、各期待度得点を比較した。 t 検定の結果、低学歴群の方が〈総合〉得点において高い値を示していた ($t(814) = 2.7, p < .05$)。下位尺度においても、〈生活習慣〉得点 ($t(814) = 3.8, p < .05$)、〈小学校課題〉得点 ($t(814) = 5.5, p < .05$) において低学歴群の期待度得点が有意に高いことがわかった。

(5) 子どもの人数

対象者の子どもの人数による比較も試みた。しかし、1人 ($N = 123$)、2人 ($N = 546$)、3人以上 ($N = 147$) と、子どもの人数には大きな偏りがあり、統計的な検定の基準を満たすことができないと判断し、分析を断念した。

考 察

1. 幼稚園への期待について

5つの下位尺度の期待度得点のうち、〈人間関係〉得点、〈表現活動〉得点、〈遊び〉得点の平均値はいずれも4.0以上を示しており、これらの点に関して幼稚園への期待度がかなり高いことがわかる。

特に〈人間関係〉得点が最も高い値を示したということからは、幼児後期の発達課題として社会性の獲得、とりわけコミュニケーションスキルの獲得が、保護者によって重視されていることがうかがえる。このことは現代の少子化傾向の反映とも受け取れる。

近年、子どもの居住する地域社会において同年齢の子ども数が減少していることに加えて、地域内の家族同士の関係が希薄化していることなどにより地域における子ども同士のコミュニティを形成することが非常に困難になっている。

このような事情を受け、幼児期にとって大切な発達課題である人間関係スキルの形成が、以前のように地域のコミュニティのなかでは獲得されにくくなってきた。そのため、安全の保障されたシステム下で集団生活が営まれる幼稚園に対して、この課題の達成を求める傾向が高くなっているのかもしれない。本来なら地域社会が果たすべき役割を幼稚園に肩代わりさせてい

る現実がここにはあるのではないだろうか。

同様のことは〈遊び〉得点についても言えるのかもしれない。先述した同年齢子ども集団の現状、地域内の家族同士の関係性の希薄化に加え、子どもを巻き込んだ犯罪の増加などのため、大人が介入することなく安心して子ども同士で遊ぶことのできる環境が少なくなっている。そのため、大人の監視の行き届かない“地域の遊び場”で遊ばせることを避け、その代償としていわば“管理された遊び場”としての役割を幼稚園に求めているのではないだろうか。

〈表現活動〉得点についても本来なら地域の祭事や子ども組、あるいは異年齢の遊び集団などのなかで伝承されるべきものであったと思われる。ところが、それらを伝承すべき枠組みを提供する地域が弱体化したことで、スムーズな伝承が行われていればさほど特殊な活動ではなかった“踊ること”、“歌うこと”、“絵を描くこと”などが、いわゆる“習い事”として特別な技能を必要とするものと見なされるようになってきたのかもしれない。そのため、家庭では十分な体験が難しい活動であると考えられ、幼稚園への期待が高まっているのかもしれない。

これらに対し〈小学校課題〉得点は2.9と「どちらでもない」の3点を下回る値を示している。読み書きなどの国語や計算などの算数は小学校以降で十分であり、幼稚園にはあまり期待していない姿がうかがわれる。

〈生活習慣〉得点も3.3という値を示し幼稚園への期待度はあまり高くはないようである。生活習慣の自律や確立については家庭で行うものとの認識を持っている結果なのかもしれない。幼稚園の現場からは、「最近の親は家庭で行うべきしつけを幼稚園が行うことを期待している」という声がよく聞かれるが、今回の調査結果を見る限り、生活習慣の確立を幼稚園に求める率は低いということができる。ただしこれは、設問の表現に若干問題があったのかもしれない。例えば、「自分で服を着替えることができる。」「箸をきちんと持つなど、食事のマナーを身につけることができる。」などは、幼稚園在園時の幼児後期の発達課題であるかもしれないが、『「おはようございます」などのあいさつができる。』や、「決まった時間に起床したり、就寝したりできる。」などの項目は、文言から読み取る内容によっては幼児後期の課題としても受け取れるが、幼児前期の自律性確立期の課題としてもとらえられてしまう。つまり、幼稚園に通園している自分の子どもはすでにこれらの習慣を確立していると考えた親は、おそらくこれらの確立を幼稚園に期待することはないのではないかと考えられるのである。この点が、本得点を押し下げられている原因となっている可能性も否めない。

2. 保護者の属性と幼稚園への期待得点との関係

(1) 対象者の年齢

対象者（母親）の年齢をもとに比較したところ、年齢低群の方が〈総合〉得点、〈生活習慣〉得点、〈小学校課題〉得点、〈表現活動〉得点のいずれも有意に高いことがわかった。

この理由としてまず考えられることは、母親の年齢が低いほど人生経験が少ないということである。このことが育児全般への自信のなさにつながっているのかもしれない。育児への自信がもてないために、自分に代わって専門的に子育てすることを幼稚園に強く期待しているのかもしれない。

また、母親の年齢が高いということは、園長・主任を除けば、担任教員よりも母親の方が高齢である可能性が高い。今回、担任教員との年齢差の測定は行っていないため推測の域を出ないが、“自分の方が年長である”という意識が担任教員よりも自分を信頼するということにつながり、期待度が下がったのかもしれない。

対象者の年齢は長子の年齢と相関が高く、人生全般の経験の他、次項で見る育児経験の長さも同じように影響している可能性が高い。

(2) 長子の年齢

長子の年齢をもとに比較したところ、母親の年齢と同様、低年齢群が〈総合〉、〈遊び〉、〈生活習慣〉、〈小学校課題〉、〈表現活動〉において高い得点を示していた。

この理由としてまず考えられることは、育児経験の乏しさということである。長子の年齢は、母親が保育職等に携わっていない限り母親の保育経験の長さに対応している。すなわち、長子の年齢が低いということは、母親の育児経験が乏しいことを物語っており、これに伴う育児への不安感が保育の専門家である幼稚園への期待度の高さとなって表れているのではないだろうか。

また、子どもが幼いということは、いわゆる“手がかかる”という意味で子育てへの親の関与度が高いことも想像される。このことが育児全般への関心の高まりを生み、さらにそれが幼稚園への期待にも反映されているのかもしれない。

さらに、高年齢群は長子が6歳以上の群であり、既に小学校入学を果たしている。その結果、親の興味・関心は既に小学校以上の学校へと移っており、その反映として幼稚園への期待が低いかもしれない。

(3) 末子の年齢

末子の年齢をもとに比較したところ、〈総合〉、〈生活習慣〉、〈小学校課題〉、〈表現活動〉の各期待度得点において年齢低群が高かった。

この結果は、長子の年齢の項で検討したと同様、育児経験の乏しさという要因によっていると考えることができる。

また、対象者の年齢との相関がやや弱い相関を示すにとどまっている本項においても、上記2項と同様の項目において期待度の差が見られることから、対象者の人生経験そのものというよりも育児経験の豊富さが幼稚園への期待度に影響している可能性が高いことが示唆される。

(4) 対象者の学歴

対象者の最終学歴をもとに比較したところ、低学歴群の方が〈総合〉、〈生活習慣〉、〈小学校課題〉において期待度得点が高いことがわかった。

この結果からは、子どもを育てることに対して、低学歴の保護者は自信を持ってないでいる可能性が示唆される。すなわち、高学歴の保護者は自己効力感が高く、自信を持っており、育児において幼稚園やその他の協力はさほど必要ないと考えているのかもしれない。

この点は、特に〈生活習慣〉、〈小学校課題〉でその差異が大きいことから読み取れる。この2項目は主に“親による躾けや練習（あるいは訓練）”によって習得される項目であり、親のこれまでの学校教育での経験が大きく影響するものであることが考えられる。同時に、〈人間関係〉、〈遊び〉、〈表現活動〉の3項目に学歴による差異が存在しないのは、これらが親による訓練の占める割合が小さな項目であるからなのではないだろうか。

おわりに

今回の調査から、保護者が幼稚園教育に求めているのは、教科教育の低年齢化ではなく、むしろ学校組織では身に付きにくい要素、例えば、対人関係スキル（遊びも含めて）や表現活動などであることがわかった。今後は、自由記述やインタビューなどの質的なデータも加味しつつ、保護者のニーズをきめ細かく分析することで、幼稚園教育におけるカリキュラムのあり方

について検討していきたい。

引用文献

- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値：今，なぜ子どもを産むのか．教育心理学研究，47，170-179.
- 高濱裕子 2000 子どもをめぐる大人の役割と関係の認識：幼稚園教諭と母親の比較から．保育学研究，38，28-35.
- 倉戸直実 2001 幼稚園に何を期待するのか．大阪芸術大学短期大学部紀要，25，207-225.

注)

本調査は，愛知県私立幼稚園連盟第2教育研究部が行った“私立幼稚園における子育て支援のあり方”に関する調査の一部として実施した。